

コロナ禍による外出自粛もあってか、すこしさびしい7人の参加でしたが、元氣よく輪読を進めました。今回は、太平記前半の山場のひとつ、楠正成討死の場面。梅松論の並行記事も参照しながら、正成は自分の提案が受け入れられず、無念の思いを胸に戦場に臨んだことを学びました。子供のころ教えられた忠臣像とのずれをどう考えるか。多様な解釈ができそうです。

◇この日の輪読箇所は次の通りです。

(二) 新田義貞進発の事

義貞、赤松攻めに手こずる (P34～39)

後醍醐天皇の命令で、九州に下った足利尊氏の追討に向かった新田義貞は、まず、播磨・白旗城に籠る赤松円心を攻める。だが、円心の術策にはまって攻め倦み、白旗攻略を断念。山陽道を西へ船坂峠に向かった。

備中・福山城に迎撃陣 (P45～48)

播磨・備前境の船坂峠は険阻な難所だが、近くの熊山に挙兵した児嶋高德の陽動作戦が奏功し、手薄になった足利勢の隙について船坂峠の突破に成功。一族の大井田氏経を吉備路の要衝、福山城に配して、九州から東上する足利勢を迎え撃つ態勢をとった。

尊氏も官軍の立場を取得 (P49～52)

尊氏は、上洛を促す赤松円心にこたえて太宰府を出発、途中立ち寄った厳島で三宝院の賢俊僧正が携えてきた持明院統光厳上皇の院宣を受け取った。(梅松論は、尊氏の院宣受領を九州落ちの途中とする)。これにより、新田氏と同じく皇統をいただくこととなり、軍勢動員に拍車がかかった。鞆の浦からは尊氏が海路、弟の直義が陸路の二手に分かれて進む。

新田勢敗れて後退 (P53～57)

福山城を守る大井田氏経は足利勢の攻撃を受けて奮戦するが戦力差を如何ともし難く、船坂の本隊に帰還した。義貞は、このままでは不利と判断、全軍を摂津に引き上げて、そこで勝負を決する覚悟を固める。

(七) 正成兵庫に下向し子息に遺訓の事

「討死せよとの勅定」 (P61～64)

義貞の兵庫後退を知った後醍醐天皇は楠正成に援軍を命じた。正成はいったん山門への避難を献言するが、「皇軍の恥だ」と退けられる。正成は「討死せよ」ということだと受け取って兵庫に向かう。途中、摂津の桜井で息子正行に討死の覚悟を告げ、「生き残って敵を倒せ」と諭して、河内に返した。

戦線拡大で楠勢孤立 (P65～69, 77～81)

延元元年(1336)5月25日、足利尊氏は海路、弟の直義は陸路で、兵庫に迫った。迎え撃つ新田方は総大将の義貞以下が兵庫津の三か所に分かれ、楠正成は山寄りの「湊川の西の宿」に陣を張った。混戦の中で新田勢が足利方の兵船に合わせて生田方面に移動したため、楠勢は孤立し、激戦の末に正成・正氏兄弟はじめ七十余人が戦場近くの民家で自害した。

湊川敗戦で天皇再び叡山へ (P87～90)

新田義貞が兵庫で尊氏に敗れたため、後醍醐天皇は、尊氏が鎌倉から上洛した時以来、この年二度目の叡山への避難となった。

尊氏、東寺に持明院統を迎える (P94～97)

後醍醐天皇の叡山臨幸に同行しなかった光厳上皇ら持明院統の一行は、尊氏に助けられ、東寺に入った。

第18巻輪読予定ページ (5月18日)

- 1) 219 主上、事の様～222 心をなす
- 2) 227 瓜生判官～230 通つてけり
- 3) 230 瓜生判官～233 懸け並ぶ
- 4) 235 延元二年～238 満てり
- 5) 244 金崎城～248 臥したりける
- 6) 248 新田越後守～253 寒からしむ
- 7) 254 夜明けければ～256 承りし
- 286 その御首～288 渡されけるなり
- 8) 288 金崎城～292 書けるなるべし
- 9) 292 その後～295 給ひけり
- 10) 295 その後～300 添へられける